

厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励補助金制度とは？

厚岸町では厚岸湖、別寒辺牛湿原、ほか町内の自然環境を次世代へ引き継いでいくため、専門分野の学生や研究者に支援をしています。
このページでは、制度を活用した研究の一部をご紹介します。

研究の背景

近年北海道の湿地や海浜部では環境の劣化が顕著になっています。道内の希少な生物をまとめた「北海道レッドデータ」ではこれらの環境に生息する昆虫類が多くあげられており、湿地や海浜環境にどんな昆虫がいるかの調査は非常に重要です。また豊かな自然環境だけでなく、厚岸町内には市街地や公園(住居)、沿岸や漁村(漁業)、牧草地や耕地(農業)、町有林などの林地(林業)といった産業や人の営みが形成する「景観」が存在し、そこに独自の生物多様性が育まれています。

これまで町内の昆虫に関する調査は例が少なく、また景観と昆虫の多様性の関連について調査はあまり行われてきませんでした。そこで今回はカメムシの仲間に注目し、町内の自然環境にどれくらいの種がいるのかや、景観ごとの種の多様性の特徴について解明を目指しました。

厚岸町内のカメムシの仲間

カメムシの仲間(半翅目)は大きく3つのグループに分かれます。今回はセミやヨコバイなどを含むグループと、カメムシやアメンボなどを含むグループの昆虫を町内の18か所で、網や大型吸引機、ライトトラップなどを使って採集しました。その結果、町内初記録となるカメムシの仲間が233種見付き(北海道レッドデータ掲載の5種も含む)、過去の調査で記録されていた10種を含めて町内には243種(北海道全体で記録されている種類の40%)のカメムシの仲間がいることがわかりました。



▲カメムシの仲間(半翅目)の分類



水鳥観察館で採集されたトビイロアオズキンヨコバイ(左)と、別寒辺牛湿原で採集されたオオイナズマヨコバイ(右)
※ともに希少種

また、12か所の調査地を住居、漁業、農業、林業の4つの景観に区分し、景観ごとに採集した昆虫の多様性の度合いの指標となる値を算出して、多様性の特徴を比較しました。

	多様度	特 徴
住居	中程度	人為的な植栽により植生の多様性が比較的高く、昆虫の多様性も高くなった。
漁業	最も低い	海浜部は昆布干場があって海浜植生が乏しいため、昆虫の多様性も低かった。
農業	低い	牧草地は植生が牧草のみで均一化され、生息する種類が限定された。
林業	最も高い	樹木や下草の種類が多く、植生の多様性が高いため、そこに生息する多くの種類が確認された。

まとめ

町内広域の詳細な調査により、多くのカメムシの仲間が生息していること、また景観ごとに独自の種類構成になっていることがわかりました。今後も調査を継続し、人間活動が各景観の昆虫に与える影響を明らかにしていく予定です。

北海道教育大学旭川校の奥寺繁氏らによる『厚岸町における景観生態学からみたカメムシ目昆虫の種多様性構造』より。
報告書などの本文は、水鳥観察館のホームページで見ることができます。

● 問い合わせ／水鳥観察館 ☎ 52-5988

水鳥観察館のホームページはこちら



厚岸町における景観生態学からみたカメムシ目昆虫の種多様性構造
厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励金の研究事例を紹介します